

## 「昔のことを思い出して」 (高原裕子)

[おすすめしたい本：織守きょうや『記憶屋』]

考えてみると、幸せな思い出より嫌な思い出のほうを鮮明に覚えていたりする。「記憶屋は、忘れたいことがある人の前に現れて、忘れたいことだけ忘れさせてくれる。悪い思い出は全部無かったのと同じになる。」

この話には、一人の青年が出てくる。彼は彼の幼馴染みの記憶の欠如や、彼が長年見続けている悪夢が、街で噂の「記憶屋」と何か関係しているのではと考えた。「記憶屋」の真相に迫るため調べをすすめた彼は、記憶が消されている3人の人物に出会う。彼等から消えていた記憶は、克服することができない恐怖症、大切な人の死、幼馴染みへの恋心。これらの消された記憶は、どの人にとっても今後の人生に影響する記憶である。

記憶を消すような大きな決断で、人生が大きく変わることもあるだろう。いじめや恐怖症、悲しく辛い記憶は、時に私たちの足取りを重くし、生きることを苦しくさせる。本来記憶は消せるわけなどなく、私たちが人である以上常に付きまとってくる。もしかしたらその記憶があることで、望まない人生を歩むかもしれないし、あまりの辛さに自殺を選んでしまうかもしれない。

でも、その記憶は全て要らないことなのだろうか。私も、いじめられていたことがあった。もしその記憶を消したら、あのときのことを思い出して恐怖に怯えたりはしないだろう。しかし、その記憶も全部含めて私となるのではないか。今の私は、この重りを取って無かったことにしたくない。この経験があったからこそできた友達もいるし、わかった人の優しさもあるから。

この本を読み終え、私は過去をふまえた自分のあり方について、こんなにもじっくり考えていたことに驚いた。

記憶屋は物語の終盤でこう言っている。

「みんな何かをやり直すために記憶屋を探すけど、やり直しなんて、本当にきくのかなあ。」

記憶屋が、もしあなたの目の前に現れて嫌な記憶を消してあげると言われたら、あなたはどうするだろうか。